

仙川教会 10月22日主日礼拝 説教要旨 「われらの国籍は天にあり」

ヨブ記 16章 18～22節 フィリピ書 3章 17～4章 2節

☆教会暦では今日で聖霊降臨節は終わり、次週から終末を待ち望む暦が始まる。終わりを覚えるとは、人生で言えば夕暮れ時である。老いを迎える今、私自身の終わりと御国に思いを馳せる。先ごろキリスト新聞社から「夕暮れになお、光あり」が出版された。5人の高齢の牧師が、自らの老いの現実を夕映えになぞらえて語っている。彼らが老いの日々にあっても信仰から紡ぎ出す言葉にいたく感動を覚えた。夕映えに向かって立つ勇気を与えられた。

☆本日の説教題は「われらの国籍は天にあり」で、パウロが晩年、異邦人伝道者として様々な困難の中にあって、御国に市民権を持つ者として自らを鼓舞し、かつフィリピ教会の信者たちを諭している。フィリピはローマ軍の兵士が兵役を終えたあと居を構えた、いわゆるコロニー・植民地であった。彼らは本国を遠く離れていても、自らはローマの市民権をもつことで誇り高く生きていた。キリスト教徒も御国に市民権を持つ者として、キリストが来られる日まで、自らを省み、地域社会の模範となる生き方をせよと説いている。

☆ユダヤ民族もかつては遊牧民であって他国をさまよう「寄留者」であるという意識をもっていた。彼らは寄留先で差別を受け、苦難に耐えて生きる一方で、彼らは神の選びの民としての「選民意識」によって、異邦人を蔑視したり、自らゲッターを作って、他との交わりを遮断して生活していた。寄留者として生きるということには、これらの相反する二つの意識に対して自らしっかり対応しなければならない。ロシアとウクライナ、イスラエルとガザの紛争、なんと人間は愚かなのか！違いを認め合い、互いを理解しあい、尊敬しあう生き方を求める努力を続けなければ、この人間の世界は「終末」を迎えるであろう。

☆好善社は、今年の8月、4年ぶりにタイ国青少年ワークキャンプを開催。またそのリユニオン（再統合の意）を10月に実施した。タイ、ラオス、日本のキャンパーが道路舗装に汗を流し、ハンセン病の元患者を訪問。そしてその振り返りのために再び集まる。互いの文化の違いを学び、理解し確認しあう。こういうことの積み重ねが大事ではなかろうか。

☆私たちは日本人で、日本に暮らす以上、特に寄留者の意識はない。しかしキリスト教徒としては、この日本社会では寄留者である。かつてのユダヤ民族と同じ選民意識を持ったり、世間を見下したりしていないだろうか。キリスト教会は近年、日本社会と同様、高齢化が進み、勢いがなくなっている。このままでいくと、教会も終末を迎えることとなる。けれども、「夕映えにも恵み」があることを信じて、新しい世代に希望を託し、今、自分に出来ることを探してみよう。十字架に苦しまれた方、そして復活された方が私の味方であるから。

☆先の「夕暮れに、なお光あり」の中の一節「しんがりを、のろのろと」を紹介しよう。『“牛はのろのろと歩く 牛は大地をふみしめて歩く 牛は平凡な大地を歩く”（高村光太郎の「牛」） 以前東南アジアの農村で・・・一日の仕事を終え、夕日を背に受けてゆっくり家路にむかう農夫と水牛の姿に、日本でのあわただしい日々を反省したことでした。・・・“やっぱり牛はのろのろと歩く 牛は急ぐ事をしない ひと足、ひと足、牛は自分の道を味わって行く”・・・「肥えた牛を食べて憎みあうよりは、青菜の食事で愛し合う方が」よい}（箴言 15章 7節）この社会のしんがりを歩かざるえない人々とこれからも一緒に歩いて生きましよう。青菜を食べながら、のろのろと。』（上林順一郎） アーメン